

倫理、政治・経済

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成25年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の公民科受験者数（追・再試験を含む。）は、220,665人で、昨年度比21,698人（9.0％）の減少となった。その原因として、地理歴史・公民10科目の中から最大2科目まで選択できることになったことや、「第一解答科目」の設定など、昨年度の試験制度変更に伴う影響の余波が続いていると考えられる。

昨年度新設された「倫理、政治・経済」（以下「倫政」という。）の延受験者数は53,333人で、昨年度に比べて3,665人（7.4％）増加している。その他の科目の延受験者数を見ると、「現代社会」は昨年度比22,175人（21.0％）減少して83,515人、「倫理」は昨年度比579人（1.6％）増加して36,165人、「政治・経済」は昨年度比5,368人（9.4％）減少して51,907人であった。昨年度は全科目で受験者数が減少したのに対して、今年度は「倫理」「倫政」では受験者の増加が見られ、他科目も受験者の減少が縮小してきていることから、昨年度行われた受験科目の制度変更や「倫政」の新設が次第に定着しつつあるのではないかと考える。

教科内の平均点については、最も高い「倫政」（60.68点）と、最も低い「政治・経済」（55.46点）との差は5.22点となった。昨年度と比較すれば差が小さくなっており、概ね妥当な状況といえる。昨年度と異なり、“4単位科目”の「倫政」の平均点が、「倫理」、「政治・経済」の単独科目を上回って最高平均点となっていることは興味深い。

公民科の目標には、「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。」とある。「倫理」で普遍的なものの考え方に触れ、自己や社会について考察すること、また「政治・経済」で社会を成立させる原理や制度、日本を取り巻く国際情勢を正しく理解し考察することは、社会の有為な形成者として必要な資質となり得る。混迷を深める世界や日本の現在の状況を考えると、「倫理」と「政治・経済」の双方を学ぶ意義はきわめて重要であるといえよう。そうした点からも、今年度「倫政」受験者が増加したことは、望ましい傾向として評価できる。

「センター試験」では、こうした公民科の目標を受験者がどの程度達成しているかを問う出題がなされ、「センター試験」の受験が、受験者にとって人間としての成長を促すものであってほしいと考える。そのために「センター試験」には第一に、基本的な用語の暗記やその理解を問うだけでなく、思考力、判断力、応用力など様々な能力を試す出題であることが求められる。第二に、取り扱う課題が抽象的な理論だけでなく、受験者の実生活と深く関連する題材を取り扱うことが求められる。第三に、設問だけでなくそれ以外のリード文や資料などを受験者が読解することによって、社会情勢や現代の諸課題について熟考させるような工夫や配慮をすることが求められる。「倫政」の受験者数増加のためにも、これら三つの点について、今後とも継続的な努力を求めるものである。

以上のことを踏まえて、本年度の試験問題について次の視点から検討及び評価を行った。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標・内容に適合しているか。また、それに準拠した教科書や授業内容に即した問題であるか。
- (2) 基礎的・基本的なものから広い視野に立った思考力・判断力・応用力を問う総合的問題まで、バランス良く配分されているか。
- (3) 「倫理」分野については、リード文は、メッセージ性を持ったもので、「倫理」を学んだ受験者を啓発するものであるか。
- (4) 「政治・経済」分野については、科目の性格に鑑み、身近な社会問題についての関心と考察を促すよう工夫されているか。
- (5) 問題の難易度、出題方法、配点等が適切であり、各分野からバランス良く出題されているか。
- (6) 過去の問題に対する意見や評価を生かしているか。

2 試験問題の内容・範囲等

試験問題の内容等については、高等学校学習指導要領で学ばせることとしている「倫理」、「政治・経済」の各分野からバランスよく出題されていると考えられる。なお、第1問から第3問までが「倫理」分野、第4問から第6問までが「政治・経済」分野からの出題であった。以下、大問及び設問ごとの出題内容及び難易の程度等について記していく。

第1問 「情報社会に生きる青年としての在り方生き方」について（青年期の課題、現代の諸課題と倫理）

情報社会の急速な進展がもたらす人間や社会に対する影響について、間接経験の拡大や直接的な人間関係の希薄化など、情報社会のもつ光より影の面についての理解を深めさせようとするリード文でメッセージ性が感じ取れる。中学、高校生に対して携帯電話等の安全な利用、情報モラルやマナーについての指導の徹底を図ることが喫緊の課題となっている現在、このリード文が「言葉」について考えさせようとする意義は大きく、受験者にこの文の趣旨を深く理解させたい。青年期の課題と現代の倫理的課題とが融合された大問となっており、全体的に無理なくまとめられている。難易度としては標準的な問題である。

問1 「単独世帯の増加」、「育児・介護休業法」、「選択的夫婦別姓制度」、「介護保険制度」など、現代の家族についての設問である。現代の家族とその課題の中で、男女共同参画社会や高齢社会の到来は取り組むべき重要な課題の一つとなっている。難易度は平易である。

問2 自我・自己・個性の形成と社会や他者との関わりについての、マズロー、フィヒテ、マーガレット・ミード、ユングの説明が適切かどうかを判断する正誤問題である。マズローについては、欲求階層説を正確に理解していること、フィヒテの考え方の説明については、「力への意志」がニーチェの概念であることを理解していればよい。マーガレット・ミードの『サモアの思春期』の考え方と、ユングの集合的無意識が「後天的」に獲得されたものではないという点については受験者の理解がやや薄かったのではないかとと思われる。やや難しい難易度の設問であった。

問3 アンケートの調査結果をグラフにし、その回答から読み取れる意図について問う設問である。問題文が長く、またグラフの項目が何を意味しているのかを理解するのにやや時間が

かかる。しかし、各文章内容から容易に解答は導き出せる。難易度は平易である。

問4 ハンナ・アーレントの『人間の条件』出典の文章を読み、人間の「活動」の具体例を選ぶ設問である。アーレントが教科書等で扱われるようになったのはここ最近のことであり、「労働」「仕事」「活動」などは受験者にとって馴染みが薄く、戸惑いもあったかもしれない。しかし、問題の文章から「活動」が言論によって他者と関わる行為であることを読み込めば、正答を導くことができる。ただ、④の「憤りを感じ」「抗議する」ことが、資料文の「語り合うこと」に該当するかどうか、問題を深く考えた受験者を悩ませたと思われる。やや難しい設問であった。

問5 ウィトゲンシュタインの思想についての理解を問う設問である。ウィトゲンシュタインも一般的には人気のある思想家だが、その思想は高校の授業では説明しにくいところもあり、受験者にとって馴染みが薄く、簡単ではなかったかもしれない。高校生にとって、論理実証主義や日常言語分析の概念を詳細に理解するのは困難だろう。しかし、「科学とは何か」という問題についてのアプローチが、ウィトゲンシュタインの思想の前期から後期への展開の中で変化し、トマス・クーンのパラダイム論に影響を与えたことなどは、科学観をめぐる今後の倫理の授業の中でも取り扱われるべきテーマであろう。その意味で先見的で有意義な出題であった。難易度としてはやや難しい設問であった。

第2問 「日本思想における理の変遷」について（日本の思想、源流思想）

わが国における「理」の変遷と「理」を探究する主体のあり方について、仏教、儒教、啓蒙思想、西田哲学を軸に時系列で語る内容で、哲学的に深く踏み込んだ内容のリード文であった。またテーマに沿って一貫した内容であるため、リード文を熟読することによる学習効果が期待され、高く評価したい。ただ、内容が抽象的であり、受験者へのメッセージ性という観点でいえば、日常生活レベルの視点が盛り込まれることが期待される。出題に関しては、資料問題が昨年度の2問から1問に減らされており、受験者にとってはじっくり各問に取り組む時間的余裕ができたのではないだろうか。また、古代、平安時代、近世、明治時代にわたってバランス良く出題されていた。全体的に思考力、判断力を問う設問が多く、やや難解な出題であったが、良問も多かった。

問1 『古事記』における神と世界について出題された。我が国における神の性格について、正しい理解を問う設問で、教材としても良問である。我が国における神々の姿は、ヘブライズム等に見られるような絶対的な存在ではなく、「自然」、つまり「^{じねん}自然」、つまり「^{しか}自ずから然ある」、自然で多様な存在であることを理解していれば、正答が導ける。基礎的・基本的な概念についての理解を問う設問であるが、正確な理解が求められる点では受験者にとって平易な問題ではなく、標準的な難易度である。

問2 悲しみを生み出す「煩惱」という概念から、ブッダの基本的な教えの内容を問う設問である。①～③は大乘仏教、ウパニシャッド哲学、ブッダの教えである四諦八正道の説明が基本になっているが、各選択肢すべてに誤りを含み、それぞれの教えについて正確な理解を求めている。リード文中の「ブッダ」は文脈から歴史上のゴータマ＝ブッダを意味しているので、設問の「ブッダ」も同様と考えるべきであるが、倫理の学習では、歴史上のゴータマ＝ブッダの教えと大乘仏教とは区別されているので、このような設問の場合は、「ゴータマ＝

ブッダの教え」として問うて欲しい。標準的な難易度である。

問3 末法思想の正確な内容の知識を問う問題で、受験者にとっては見落としがちな事項であったのではないだろうか。末法思想を含む仏教的歴史観については、「教」、「行」、「証」の3つの点に注目しなければならないが、「行」については、通常の教科書では「修行」という意味で記されており、設問中の「修行者」という記述には、学習の進んだ受験者も戸惑ったのではないだろうか。しかし、修行者が「行」にあたることを前提とすれば、正答を導ける。やや細かい知識を問う問題であったことから、やや難解な問題である。

問4 悲しみへの共感につながる、儒家の「仁」に関わる孔子と孟子の重要語句を問う設問である。「忠」「恕」に代表されるような、孔子の説く「仁」の具体的表現・あり方の違いを漢字と共に正しく理解しているか、また孟子の四徳とそれに対応する四端を正しく理解しているかが問われている。基本的で、平易な設問である。

問5 江戸庶民の合理的思想について、貝原益軒、三浦梅園、山片蟠桃の3人の思想内容が問われた。アの文章では、「博物学的な知のあり方」という記述があることから、貝原益軒の「本草学」が結びつき、イでは「無鬼論」が山片蟠桃、ウは「条理学」が三浦梅園に結びつく。決して難解な問題ではないが、江戸庶民の合理的思想自体が、学習上の死角であることを考えれば、難易度は標準的な問題だったといえるだろう。

問6 西田幾多郎の『善の研究』をもとに、「純粹経験」、「主客未分」、「場所の論理」、「絶対無」についての文章が示され、その空欄に適語を入れる設問であった。「純粹経験」や「主客未分」については西田哲学の基本的な学習事項であるが、「場所の論理」「絶対無」など、西田哲学の存在論について学習していた受験者は少ないのではないか。その意味でやや難解な設問であった。

問7 リード文の趣旨から結論を推測する設問である。先に示したように、本問のリード文は、哲学的に深い内容であるため、受験者にはじっくり読んで欲しい文章であり、それを促すこのような設問は高く評価できる。受験者にとって、総合力が問われる設問であった。各選択肢を丁寧に読めば解答は難しくないが、それぞれの選択肢が比較的長いこと、また本文を丁寧に読み込む必要があることを考えれば、難易度としては標準的である。

第3問 「西洋近代以降における批判の意味」について（西洋近現代思想、源流思想）

現代の若者が接するインターネット社会には、否定的な意味での批判があふれる一方で、教育の現場では、グローバルな競争社会を生き抜くスキルとしての「批判的思考（クリティカルシンク）」を習得することが求められている。西洋の思想の流れをたどりながら、批判の本質的な意味を考えさせるリード文は、このような環境にいる受験者たちにとって、「批判」という営みを深く考察することによって、自己のあり方と社会のあるべき姿への思索へと導かれる、意義深いものであった。また、それぞれの設問がリード文とのつながりを感じさせた。全体的には、西洋思想分野の広く深い知識と理解を必要とする、やや難しい問題であった。

問1 分野別・時代別の出題バランスを考えた「倫理、政治・経済」独自の設問である。各選択肢の人物の主張に、他の思想家の言葉などを紛れ込ませて惑わせ、正確な知識・理解を問うている。教科書では簡単にしか取り扱われないパルメニデスに関する①の「無限なるもの」はアナクシマンドロスの概念であるため、パルメニデスとしては不相当であると判断でき

る。やや難しい設問である。

問2 分野別・時代別の出題バランスを考えた「倫理、政治・経済」独自の設問で、各宗教の聖典に関する基本的な知識・理解を問う設問である。ユダヤ教の預言者たちの活動を積極的に評価する記述の選択肢が正解となっているのが新鮮である。標準的な難易度の設問である。

問3 ベーコンの4つの「イドラ」の意味する内容の正誤を選ぶ設問である。用語についての知識とともに、その意味する概念についての確実な理解を問う基本的な問題であるが、8つの選択肢であったため、表面的な学習にとどまった受験者は正答まで届かなかったであろう。難易度としては標準的な設問であった。

問4 フランス社会を批判した思想家についての記述として正しいものを選ぶ設問である。デイドロの『百科全書』編集、モンテスキューの『法の精神』、ヴォルテールの『哲学書簡』、ルソーとパスカルの思想についての知識と理解があれば正答に導くことができる、標準的な難易度の設問であった。

問5 カントの批判哲学についての理解を問う設問である。過去にも出題されていた「コペルニクスの転回」の概念に加えて、物自体の概念、因果律あるいは自然法則の認識可能性についてのカントの見解、さらには靈魂の永遠性や神の存在は、理論理性によっては認識することができないが、実践理性によっては真なるものとして認めることが要請されることなどについての理解があれば正答を導くことができる。近年、カントをめぐる教科書記述はより詳細なものになってきているため、受験者も教える側の教員も留意が必要であろう。やや難しいが質の高い設問であった。

問6 ハイデggerの思想についての理解を問う設問である。受験者にとって、ニーチェのキーワードとして用いられる「ルサンチマン」とハイデggerの「ダス・マン」を弁別するのは容易であろう。しかし、実存主義を表面的にしか理解していないと、いずれもキルケゴールの重視した術語でもある「絶望」と「不安」から、ハイデggerの術語である現存在の根本的な気分である「不安」を区別できない。また、ハイデggerの後期思想『ヒューマニズムについての書簡』の術語である「故郷の喪失」は、近年たしかに教科書への記述が見られるようになってきたが、授業で扱われることも少ないため、受験者は戸惑ったのではないと思われる。ハイデggerの思想についての詳細な知識と理解が必要なため難しい設問となった。

問7 批判とは何かをテーマにしたリード文の趣旨に合致する記述を選択する設問である。②の「現実をありのままに受け入れること」と、③の「批判を徹底して行い、批判の活動それ自体を否定する」という記述は、リード文を読まずとも不自然な選択肢だったが、①と④の選択については、しっかりとリード文を読む必要のある標準的な設問であった。

第4問 「近年の発展途上国の政治的・経済的動向」について（政治分野、経済分野の融合問題）
先進国の経済や資本の動向との複雑な絡み合いの中で、著しい経済的台頭を遂げたいいくつかの発展途上国の発展のあゆみを概観しながら、今後の国際社会の課題を展望するメッセージ性のあるリード文である。全体は、政治分野と経済分野の融合問題である。

問1 世界の1970年代以降の出来事について問う問題である。選択肢はいずれも基礎的な知

識が扱われている。アメリカのレーガン政権下で生じた「双子の赤字」の内容を知っていれば、容易に正答が導けるが、教科書を習熟しておかなければ選択肢の③④は判断できない。全体として、やや難しい問題である。

問2 日本の1980年代以降の行政改革について、基礎的な知識を問う標準的な問題である。

問3 各国の政治体制について、基礎的な知識を問う標準的な問題である。選択肢の2カ国の内、日本・アメリカ・ドイツ・韓国の政治体制の概要は基礎的な事項である。一方、イタリア・ブラジル・カナダ・フィリピンの政治体制は基礎的な知識とは言えない。

問4 各国の貧困や社会保障をめぐる問題について、豊富な知識と思考力、および資料の読解力など総合的な応用力が求められる難しい問題で良問である。出題された資料以外にも、各国の社会保障費の対GDP比や合計特殊出生率に関する知識が求められている。また、「政治・経済」の問題としては、今までにない新しい傾向の出題である点も特筆に値する。受験者には教科書の習熟、とりわけ正確な知識と思考力、また資料の読解力が求められる。今後、このような幅広い知識を総合し、かつ、思考力を求める出題を期待する。

問5 租税や国債をめぐる問題について、基礎的な知識を問う標準的な問題である。

問6 国際平和を維持する仕組みについて、正確な知識を広く応用することが問われた問題である。やや難しい問題である。勢力均衡と集団安全保障の正確な理解と具体的事例への応用が求められた。

第5問 「民主主義と権利」について（政治分野）

学生AとBの二人による会話文形式のリード文からなる政治分野の問題である。国際的な出来事から個人の問題にいたるまで幅広い話題をコンパクトにまとめたため、やや会話の脈絡が極端であり、不自然さが感じられる。ただ、若者の政治参加を促したいという、出題の意図が感じられメッセージ性のあるものになっている。

問1 代表民主制に対するルソーの思想について、基礎的な知識を問う問題である。「政治・経済」の問題では、リード文中の空欄補充の問題は初めての出題であり、受験者にリード文を読ませようとするメッセージが感じられる。しかし、この設問は空欄の前にルソーの名があることによって、選択肢とのかねあいで、平易な問題になってしまった。

問2 日本における一票の価値の格差、選挙制度について、基礎的な知識と資料の読解を問う標準的な問題である。資料の読解力を求める意図は理解できるが、資料の内容が平易なため、十分意図が反映されていない。

問3 日本の情報公開制度について、基礎的な知識を問う問題である。平易な問題である。

問4 近年の各国の民主化と経済格差の是正について、地図を用いた時事色の強い難しい問題である。受験者に時事的事項を求める出題の意図は理解できるが、教科書の記述範囲を基本とする大学入試センター試験の問題としての適否は、意見が分かれると思われる。ただ、問われている時事的知識のレベルは基礎的である。なお、地図を用いた出題は、平板な知識だけではなく多角的な知識を求めている点で評価できる。

問5 日本における参政権の保障について、基礎的な知識を問う標準的な問題である。受験者は、最高裁判所の違憲判決は、正確に把握しておいてほしい。

問6 日本の国会の権限について、基礎的な知識を問うかなり平易な問題である。

問7 日本における個人の権利保障について、正確な知識を広く応用することが問われた問題である。本来、やや難しい問題であると判断するが、受験者が「労働基準法」＝「差別的取り扱いをしてはならない」と安易に結びつけても正答となる点は、もう少し工夫が必要だろう。

第6問 「市場取引を支える光と影」について（経済分野）

幅広く多様な経済分野の問題である。リード文は、市場経済の正と負の両面を踏まえながら、市場取引を支えるルールをいかに作ってゆくのか、と言う課題を広い視野と展望を持って考えることを訴えている。出題者の高い見識が伺えるメッセージ性の高いリード文である。

問1 貨幣の機能について、基礎的で標準的な問題ではあるが、具体的な事例を記した選択肢を考えながら判断する思考力が求められた問題である。

問2 企業や市場の仕組みについて、基礎的な知識を問う標準的な問題である。

問3 消費者の四つの権利について、正確な知識を広く応用することが問われた問題である。やや難しい問題である。権利の内容と具体的な事例を組み合わせることで、正確な理解が求められており、工夫がされている点が評価できる。

問4 企業の無過失責任の供給への影響について、基礎的で標準的な問題ではあるが、具体的に供給曲線の動きを考えながら判断する思考力が求められた問題である。問題中のグラフは、受験者の判断の手がかりになるだろう。

問5 時代における経済の特徴について、基礎的な知識を問う標準的な問題である。歴史的観点の問題は、とかく難しくなりがちだが、時代区分が大きく区切られているので、標準的な難易度になっている。

問6 経済学と経済理論について、基礎的な知識を問う標準的な問題である。経済理論については、教科書の習熟が大切である。

問7 日本経済のあゆみと現状について、基礎的な知識を問う標準的な問題である。

3 試験問題の分量・程度

「倫政」の本試験は昨年度と同様、大問6問で構成され、「倫理」分野、「政治・経済」分野から、それぞれ大問が3問ずつ出題された。設問は「倫理」分野から19問、「政治・経済」分野から20問で、50点ずつの配点も変わっていない。

「倫理」分野では、「倫理」本試験の大問3問のリード文及び各設問の中から数問を組み合わせ出題された。設問は、基本的な人名や用語、概念に関する知識・理解を問うものから、基礎知識をもとに資料文を丁寧に読むことで正解に至ることができるような思考力・応用力を問うものまで出題され、さらに各分野のバランスもとれていた。変更点は、第3問に、「倫理」と共通のリード文が付けられて各設問の間にテーマに沿った一貫性が生まれたことと、出題の分野と時代に関してバランスをとるため源流思想を中心に西洋近現代の内容も含んだ「倫政」単独の設問が2問出題されことであった。「倫理」分野全体としての難易度は、やや難しいものであった。

「政治・経済」分野の問題は、教科書に基づく基礎的な知識を問う問題を中心に、グラフや資料から判断する応用力や思考力を問う問題を織り込んだ作りになっており、分量・程度ともに適切であった。問題配分及び配点については、政治的分野が10問26点、経済的分野が10問24点であっ

た。各分野の問題配分についてはバランスのとれた構成となっており、配点についてもおおむねバランスがとれていると言える。基礎と応用というレベルの分類では、基礎的な問題を重視した構成となっている。

「倫政」については昨年度新たに設けられた科目であり、「倫理」と「政治・経済」の2科目からの出題ということで、各科目の内容や分量、解答時間配分等のバランスを取ることが難しかったと思われる。しかし、今年度は受験者が増加していることでもあり、「倫理」と「政治・経済」それぞれの科目の特長を生かした出題となるよう、今後とも一層の工夫と努力をお願いしたい。

4 試験問題の表現・形式について

問題数については、大問数は6、設問数は39、解答数は39で昨年度と同様であった。大問は第1問から第3問までが「倫理」分野、第4問から第6問までが「政治・経済」分野からの出題であった。設問数及び解答数は、「倫理」分野が19問、「政治・経済」分野が20問とほぼ同数であり、配点は50点ずつであった。なお問題形式や配点の一覧表は資料として最後に掲載した。

「倫理」分野は、「倫理」の「青年期・現代社会」と「日本思想」と「西洋近現代思想」のリード文と設問の一部が転用されたが、第3問の問1と問2は「倫理、政治・経済」のみのオリジナル問題であった。後ろに示した資料の通り、昨年度と比べて、用語や人名等についての知識を問うものと総合的な思考力、判断力、応用力を問うものが減り、基礎的・基本的な概念などについての理解を問うものが増えた。これは、倫理の本試験とも共通する傾向である。各設問の表現については、受験者が十分に理解できる適切なものだった。

「政治・経済」分野の第4問のリード文は「倫政」オリジナルのものだが、設問は「政治・経済」の第1問から3問、第2問から1問、第5問から2問ずつ抜き出され、第5問は「政治・経済」の第3問が、第6問は「政治・経済」の第4問が、リード文・設問ともにそのまま用いられた。リード文は、各大問とも分かりやすく、政治経済の諸問題に対する意識や関心を喚起する良い文章である。特に第4問のリード文は、コンパクトながらメッセージ性を持った良文である。設問は、リード文を読んで正答を求める形式が定着しており、リード文のテーマとの関連性が高い内容であるが、第5問のリード文は、話し合われている内容が極端であり、リード文を会話形式にする必然性が薄いように感じられた。各設問の選択肢の文は、おおむね簡潔にまとめられている。グラフや資料を用いて思考力・判断力を問う問題が5問出題された（昨年度より2問増加）。このような問題は、身近な社会問題への関心を高め考察を深める問題であり、単に基礎的な知識の暗記量だけを問うのではなく、高等学校学習指導要領に示されている「生きる力」「自ら学び考える力」が問われている点は高く評価できる。

5 要 約（総括的な評価）

リード文及びすべての設問について逐一検討してきた。ここの設問に対する評価は前述のとおりである。以下、各分野について総括的な評価を述べる。

(1) 「倫理」分野

各リード文及び資料文は、全体的に倫理的示唆に富む意義深い内容となっており、受験者へのメッセージ性、倫理的思考を深める教材としても高く評価できる。また、大問ごとにリード文が

付された点も、前年度から大きく改善された点である。大問に付されたリード文は、従来より受験者を啓発し、現代社会に生きる指針を与えるような大きな意義が認められてきた。今後もこのようなリード文の意義を踏まえた作問を要望したい。資料文としては、アーレントの『人間の条件』が取り上げられ、思想家の理解を深める上で教材としても高く評価できる。

設問については、基礎的な知識や概念の理解を問うものや、思考力、判断力、応用力を問うものなど全体的によく工夫されていた。また、本試験「倫理」にはないオリジナルな問題も付され、各分野にわたってバランスよく出題された。一方、全答形式の正誤問題や、選択肢が8つ以上ある設問が複数出題されたこと、受験者にとって馴染みの薄い思想家や用語が出題されたこと等から、難易度としては全体としてやや難解であった。

高等学校学習指導要領との関連においては、各分野からおおむねバランスよく出題されており適切であったと言えよう。その中で高等学校学習指導要領の内容「(2)ウ 現代の諸課題と倫理」に関わる第1問について、同じ公民科の「現代社会」や「政治・経済」との共通性が強い分野だが、昨年度と同様「倫理」の科目の特性を生かした出題となっていたことは高く評価できる。

(2)「政治・経済」分野

高等学校学習指導要領で高等学校教育に求められている内容にそって、本年度も広範囲にわたって出題されている。身近な社会問題をもとに、多面的・多角的な考察や国際的な視野を必要とする問題も昨年度同様、多く見られる。全般的に、単に知識だけを問うにとどまらず、思考力や資料の読解力を問おうとする意図が感じられ、そうした基本姿勢の継続は評価できる。

全体として教科書の学習内容の基礎的な知識を問う出題が中心となっているが、基礎的な知識をもとに応用力や分析力をさまざまな形式と内容で問う工夫がなされていた。昨年度、出題されなかった時事問題も本年度出題された。

「政治・経済」という科目が目指す「良識ある公民として必要な能力と態度」を育成するうえで欠かすことのできない基礎的な知識や出来事、概念の理解を問うことは重視しつつ、そうした基礎的な知識をもとに思考力、分析力を問う問題もさらに充実させていくことを希望する。

本年度の本試験では、従来、出題されなかった新傾向の問題が複数出題された。具体的には、第4問の間4、第5問の間1である。受験者の幅広い知識の総合力を問う問題やリード文の空欄補充など、今後とも一層の改善を加えながら継続して出題されることを希望する。

「センター試験」は、単に選抜のための学力評価だけでなく、高等学校教育のあり方に対する重要な指針となり、高等学校の「政治・経済」の授業内容や指導のあり方を方向づける大きな役割を担っている。よって、今後とも、教科書に基づく基礎的な知識や概念の理解を問うことに重点を置きつつ、時事問題や資料を用いて多面的・多角的に考察させる良質な問題の作成を、今後とも期待するものである。

資 料

「倫理分野」

主に基礎的・基本的な用語や人名等についての知識を問うもの	第2問 問1 (2)	計 1問 2点
主に基礎的・基本的な概念等についての理解を問うもの	第1問 問1 (2) 第3問 問1 (3) 問2 (3) 問2 (2) 問5 (3) 問3 (2) 第2問 問2 (3) 問4 (3) 問3 (2) 問5 (2) 問4 (2) 問6 (3) 問5 (3) 問6 (3)	計14問 36点
主に総合的な思考力、判断力、応用力を問うもの	第1問 問3 (3) 第2問 問7 (3) 問4 (3) 第3問 問7 (3)	計 4問 12点

「政治・経済」分野 注：() 内の数字は配点、また*印は標準的な問題と判断されたものである。

主に教科書に基づく知識により正解が得られる問題	第4問 問1 (2)* 第6問 問2 (2)* 問2 (2)* 問5 (2)* 問3 (3)* 問6 (3)* 問5 (2)* 問7 (3)* 問6 (3) 第5問 問1 (3)* 問3 (2)* 問5 (2)* 問6 (2)* 問7 (3)	計 14問 34点
主として教科書に基づく知識を使って思考力や応用力により正解を導く問題	第6問 問1 (3)* 問3 (3) 問4 (2)*	計 3問 8点
主として時事的・社会的な知識から国内的・国際的な諸課題を考えさせる問題	第5問 問4 (3)	計 1問 3点
資料やグラフ・図表などを使って理解力・分析力を問う問題	第4問 問4 (2) 第5問 問2 (3)*	計 2問 5点